

篠原房枝・小川政弘作 「星占い」

池田和美 あーあ、また遅くなっちゃった。

中村浩子 コーチも練習熱心なのはいいけど、こう毎日遅いんじゃないかね。

和美 ほんと！ たまには太陽があるうちに帰りたいですねえ！

ナレーション 池田和美と中村浩子は青春高校の2年生。同じバスケット部に籍を置く、親友同士です。今日も部活動が終わり、肩を並べて、夜になった帰り道を歩いていました。

和美 ワァ、きれいな星空！

浩子 ほんと。あ、流れ星！

和美 どこ どこ？！

浩子 ほら！ ああ、消えちゃった。

和美 残念。見はぐっちゃった。ねえ、浩子、何か願い事した？

浩子 ううん。和美の声に気取られてそれどころじゃなかったわよ。

和美 ごめーん。でも、流れ星が消える前の願い事って、ほんとに効くと思う？

浩子 なんとなくね。流れ星になんて、あつと言う間だから、あんまり当てにならないじゃない？ だけど、そこへ行くと、わたし、“星占い”なんて断然信じちゃう。

和美 へえー。同じ星なのに、どう違うの？

浩子 同じなんかじゃないわよ。流れ星は一瞬のもの。でも“星占い”っていうのは、何千年、何万年という長い間輝いている星の位置や動きから出てくるものだから、真実性があると思うの。だからわたし、星占いに書いてあることは、よく心に留めて行動しているんだ。

和美 そうなの？ 浩子がそんな星占いの信者だなんて知らなかった。でも、わたしはやっぱり納得できないなあ。だって一つの星座を取ってみても、何万人もの人がいるとしたら、その人たち全部が同じ運命になるなんて考えられないもん。

浩子 違うんだなあ。割と一般的には、例えば乙女座なら、その星座の人全部って感じだけど、厳密なのは、一人一人の生まれた日や時間などによってずいぶん違うの。だけど、いちいちそれ全部は書き出せないから、十二星座に分けてあるわけ。分かった？

和美 なるほどね。割と難しいのね。

浩子 今度、和美の見といてあげる。それじゃまたあしたね。(オフ)バイバイ！

和美 バイバイ！ (モノローグ)星占いかあ…。

(効果音) (教室のガヤ)

ナレーション 放課後、浩子が血相を変え、大慌てで教室に飛び込んできました。

浩子 和美、和美は来てる？

和美 浩子、おはよ。朝から何をそんなに慌ててるの？

浩子 あ、和美。これを見て！ この間調べたあなたの今週の運勢は、「二、三日のうちにとっても悪いことがある」って出たの。特に魚座のこの星とこの星が重なる日、つまり今日が要注意の日なの。今日一日はなるべくおとなしくしてたほうがいいわ。

和美 (笑い出す) 浩子ったら、何を言い出すかと思えば、まだ寝ぼけているんじゃない？

浩子 (ムツとして) ずいぶんね。人が本気で心配してるのに！ 何があっても知らないから！

和美 ごめん。心配してくれてありがとう。でもわたしは星占いなんて信じないから大丈夫よ。わたしには神様がいるし。

浩子 神様って、キリスト教の？

和美 そうよ。わたしが信じてるのは、唯一絶対の神様だけ。だから星占いなんて信じない。神様が守ってくれるもの。

浩子 それはおかしいわよ。だって、キリスト教の神って万物の創り主^{つく}ってじゃない。その神様は宇宙も創ったんでしょ？

和美 そうよ。ちゃんと聖書に書いてあるわ。

浩子 だったら、その宇宙の、規則正しい天体の動きから判断する星占いって、確かに真実性があると思うけどな。

和美 それはそうだけど…。

浩子 だって考えてごらんよ、和美。星占いってさあ、昨日今日できたんじゃないくて、2千年も3千年も前からあんのよ。ちやーんと天文学の科学的データに基づいて、ある星のある動きの下では、必ずある一定の出来事が起こる。そういう長い間の歴史的事実に従って出来上がってるのよ。だったら、その客観的データを信用して、それに従って行動するって、絶対間違っていないと思うな。

和美 そりゃ、わたしだって科学の力って信じてるわよ。だけど、星占いって、なんかそれと違うのよ。どっかが間違ってるのよ。

浩子 だったらその間違いをちゃんと言ってごらんさいよ。

和美 それは…。うまく言えないけど…。

浩子 ほらごらんよ。大体あんたさあ、神様を信ずるのは結構だけど、その神様の創った星の動きから、ちやーんとわたしたちが正しく行動できる原理が割り出されてるのに、それを否定するなんて矛盾してるわよ。人がせっかく“和美に悪いことが起こらないように”って心配してあげてんのに。もう何が起こっても知らないから！ 勝手にして！

和美 ちょっと待って！ 浩子、そんなつもりじゃないのよ。浩子！ あー！

(効果音) (車の急ブレーキ)

浩子 (振り返って)あ、和美～～！

(効果音) (救急車サイレン)

和美 ——ここは、どこ？ 病院？ ……そうか、わたし…。

母 あ、和美、気がついた？ どう、痛む？

浩子 和美、大丈夫？

和美 あ、浩子…。

母 浩子さん、心配しなくていいよ。でももう大丈夫。お医者さんが、少し外傷はあるけど、血圧も脈もしっかりしてるし、内出血もしてないって。

浩子 和美、ごめんね。あんなどこで言い合いしなきゃよかった。だけど、やっぱりわたしの言ったとおりでしょ？ 絶対に当たるんだから。また家へ帰って、和美がすっかりよくなるまで、毎日占ってあげる。だから元氣出して！ じゃ。

ナレーション 和美は、帰っていく浩子の後ろ姿を見送りながら、複雑な気持ちでした。浩子の思いやりの気持ちはよく分かるのですが、星占いに頼ることに、まだ心の中にわだかまりがあるのです。

和美 浩子、星占いは間違いよ。でも…。

浩子 (エコー)神様の創った星の動きを分析して、それに従って生きるのがどうして間違ってるのよ。和美、わたしの言ってること信じないなら、もう何が起こって知らないから！(多重エコー)

和美 わたし、星占いは間違ってるって思ったけど、だけど、どこがどう違ってんだろう。浩子の言ってること、間違っていないような気もするし、第一、本当にこんな事故に遭っちゃったし…。

ナレーション 考え出すと、次第に頭の中が混乱してくる和美でした。次の日、母から聞いて教会の高校クラスのリーダー、小林さんが訪ねてくれました。

(効果音) (病室のドアをノックする音。)

和美 はい。

小林 ああ、和美ちゃん。ビックリして飛んできた。大変だったねえ。

和美 ご心配かけてすみません。先生、星占って、間違ってますよね？ 絶対におかしいですよね？

小林 星占い？ またどうしたの、思い詰めたような顔して？

ナレーション 和美は、小林さんに、一部始終を話しました。

小林 ふーん、そうか。今、意外と多いんだってね、星占って。そして割かし当たっていうじゃない。

和美 先生！ 人ごとみたいに言わないでください。先生もまさか信じてるわけじゃないでしょ？

小林 あ、ごめんごめん。もちろん僕は信じてないよ。星だけじゃなく、易占い、手相

占い、カードなど、“占い”と名の付くものは一切ね。さ、そこで和美ちゃんを悩ませてる問題だけども、僕も神様が星を創られ、その星が、あの無数の星が、きちーんとした法則に従って動いてること、そしてその動きと宇宙の仕組みを解明した天文学の力はすばらしいと思ってるよ。ここまではその浩子さんとおんなじだ。

和美 そうなんですよね。

小林 ところがさ、“その神様の創った星の動きに、一定の法則があるんだから、その法則に従って生きるの科学的なんだ”、と考えるところが違うんだな。それは一種の錯覚だ。星の動きと、人間のさまざまな出来事を結び付けて、そこに因果関係を作り出そうとするのは土台ムリな話だし、何よりもおかしいのは、この宇宙を、そして僕たち人間を創ってくださった神様を差し置いて、星の動きを人間の生と死を支配する絶対的な原理にしてしまうのは、これは“運命論”だ。人間は、そこでは、同じ被造物に過ぎない星の奴隷になってしまっている。

和美 星の奴隷？ それじゃ、それは偶像礼拝ですね！

小林 そうなんだよ、和美ちゃん！

(音楽) (エンディングBGM)

大切なのはね、僕ら一人一人を創ってくださって、一人一人を愛してくださって、いつも目的を持って最善に導いてくださる、生きた神様を信じて、ほかの何者にも縛られずに生きていくことなんだ。

ナレーション 和美は、目の前がパッと開けたような気がしました。そして、今度浩子に会ったら、じっくり話してみようと心に決めながら、まくらもとの聖書を握り締めたのでした――。

<完>